



長編推理小説

和久峻三

●京都殺人
案内シリーズ

死体の指に
ダイヤ



光文社文庫

長編推理小説／^{きょう と さいじんあんない}京都殺人案内シリーズ

^{したい ゆび}死体の指にダイヤ

著 者 ^{わ く しゅん ぞう}和久峻三

2002年5月20日 初版1刷発行

2003年6月10日 2刷発行

発行者 八 木 沢 一 寿

印 刷 堀 内 印 刷

製 本 ナ シ ョ ナ ル 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Shunzō Waku 2002

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73311-5 Printed in Japan

〔R〕本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

元文社文庫

長編推理小説

死体の指にダイヤ

京都殺人案内シリーズ

わくしゅんぞう
和久 峻三



光 文 社

『死体の指にダイヤ』—— 目次

死体の指にダイヤ

三千院の出逢であい

彦根ひこねの婚約者

宝ヶ池の女

光悦寺の茶会

宇治の容疑者

霧の渡月橋とげつきよう

河原町の死体

琵琶湖畔びわこはんの人質

室町むろまちの男を追え

闇の中の追跡

258 215 188 160 135 110 75 60 41 23 7

人質は眠る

291

洋子への容疑

346

霧の法廷

359

喪服の女

399

影の法廷

424

謎の追跡者

445

迷走法廷

473

アリバイを崩せ

511

悪魔の玩具

543

解説

山前

譲

580

死体の指にダイヤ

朝焼けの空の下で、国鉄梅小路駅うめこうじの喧噪けんそうが眼ざめた。

停車中の貨物列車の有蓋車ゆうがいの扉とびらが開かれ、貨物の積み下ろし作業がはじまっている。フォークリフトが駆動し、作業員が活発に動き回った。

「何なんや、この荷物……煙が出とるやないか？」
作業員は荷扱いの手をとめた。

しかし、その荷が燃えている、という実感はなかった。
木わくで補強した一メートル四方ほどの段ボール箱かたすみの片隅が、ぐしゃっと、つぶれて大きな穴があいている。

その穴から、白っぽい気体が、ちよろちよると煙みたいにたちのぼり、貨車の内部の薄暗い空間に、ふんわりと漂うように拡散しているのだ。

何かが燻くすぶっている様子には見えない。

白っぽい気体は煙ではなさそうである。

段ボール箱に穴があいたのは、木わくの補強が、ひ弱なために、上につけていた貨物の重圧

で押しつぶされたからだだった。

作業員は、ひとまず、段ボール箱を貨車から下ろしにかかった。予期に反して、手ごたえのある重量が感じられる。

段ボール箱が逆さになり、穴のあいた部分が下を向いた――。

「ひえッ！」

段ボール箱を下から受けとめようと、腕を伸ばした別の若い作業員が、とつぜん、真っ青な顔で立ちすくんだ。

「どうした？」

貨車の上から声がかかった。

若い相棒が、なぜ、悲鳴をあげて立ちすくんだのか、彼にはわからなかった。貨車の上から眺めると、段ボール箱の下部分が陰になって見えないのだ。

「……ひ、ひ……ひとの手が……」

若い作業員は歯を、がたがた鳴らしながら震えている。

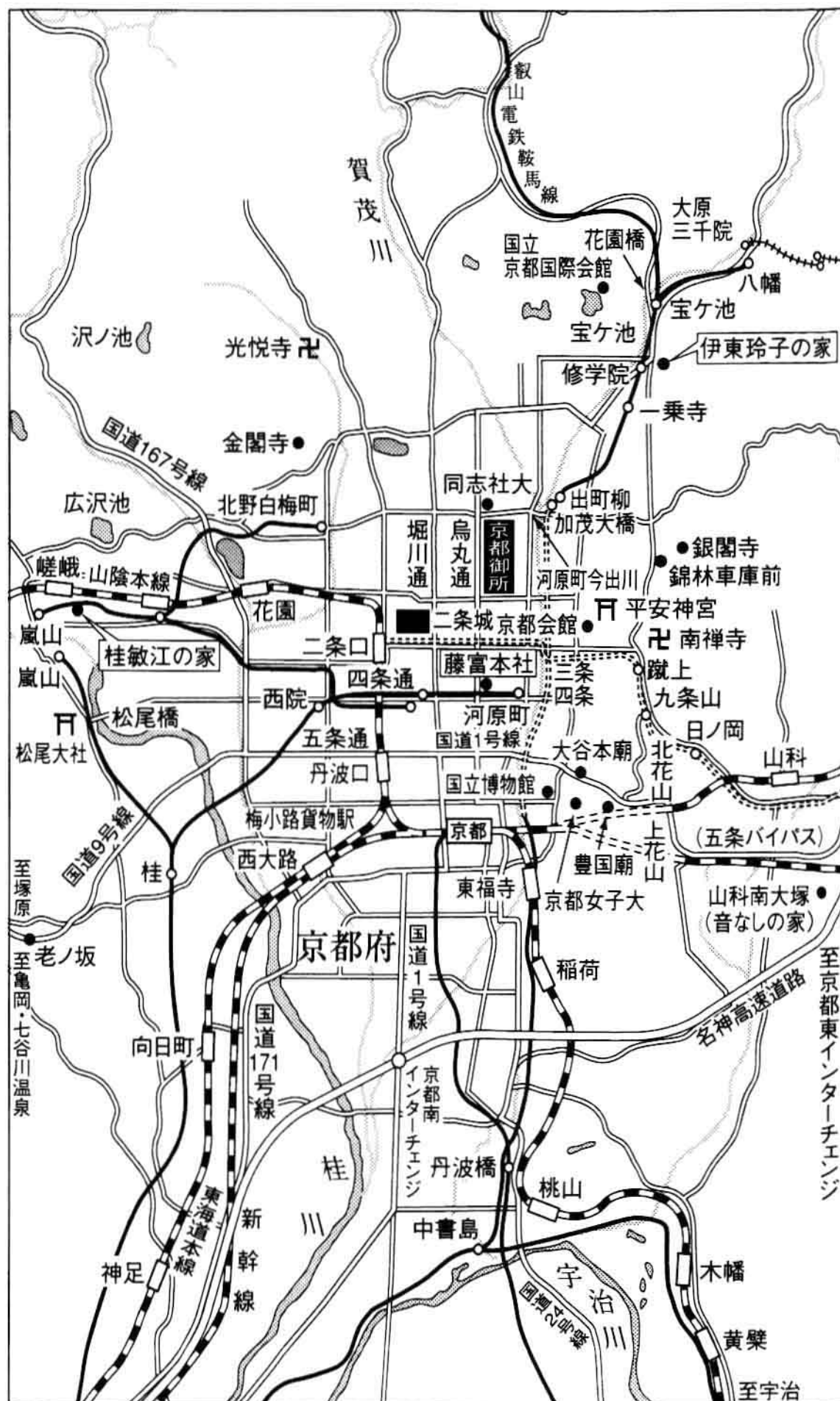
「何んやてえ……」

貨車の上から作業員が飛び下りた。

「うひえッ！」

彼は叫んだ。

身体が硬直して動かない。



無理もない。

逆さになった段ボール箱の破れ口から、血の気の失^うせた五本の指が、だらりとたれ下がっているのだ。

しらじらと白蠟^{はくろう}のように透けて見える半透明の華奢^{きゃしゃ}な指先であつた。

女の手であることが、誰^{だれ}の眼にも直感的にわかつた。

驚いたことには、ほっそりとした白い薬指に、大粒のダイヤの指輪が神秘的な光をたたえて、人をあざ笑うように、妖^{あや}しげな光彩を放っているのだ。

事件は、鉄道公安室へ通報された。

ついで警察が動き出した。

夏が明けた京の空に、白い絹糸のような秋雲が、さわやかに流れていた。

ごつた返す梅小路駅の構内で検視^{けんし}が行われた。

段ボール箱が開かれた。

両膝^{りょうひざ}を折り曲げ正座の姿勢ですわらされている若い女の死体があらわれた。

女は、生まれたときのように、一糸まとわぬ裸体であつた。

いや、正確に言うなれば、生まれたままの姿ではない。

胸や腰や下腹のあたりに、むっちりとした肉づきがそなわり、成熟した女の、みずみずしい象徴を誇らしげに晒^{さら}しているのだ。

死体の腐乱は、ほとんどみられない。

腐乱しなかったのは、ドライアイスの効果によるものだった。

段ボール箱のなかに、多量のドライアイスが詰められていた形跡があったのだ。

ドライアイスは輸送中に昇華^{しょうか}して、残り少なくなっていたが、段ボール箱の破れ口から、ちよろちよると、たちのぼっていた白っぽい煙のような気体は、ドライアイスの気化したものだとわかった。

不思議にも、女の顔には苦悶^{くもん}の表情が見られない。

楽しい夢でも見ているような死に顔であった。形のよい唇^{くちびる}には、うつすらと微笑さえも浮かべている。

長い、まつげが、閉じている瞼^{まぶた}をおおい、すつきりと通った鼻筋は、面長^{おもなが}の色白の顔を、きりつと引きしめていた。

身体の線は、ぴんと張りつめた若い魅力にあふれている。

ともかくも、惜しいような魅力を秘めている女性であった。

死体は司法解剖に回された。

外見だけでは死因がつかみにくいのだ。

外力による損傷も見られない。

「それにしても、仏さんが薬指にはめているダイヤの指輪は、どうも気にいらんな」
むつつり屋で通っている音なしの音次郎^{おとじろう}こと音川音次郎^{おとかわ}警部補は首をひねった。

高価な大粒のダイヤをはめた箱詰めの死体なんぞ、彼の三十年に及ぶ刑事生活の輝かしい経歴のなかで、これが初めての事件であった。

ほかの刑事たちも、みんな同じ疑問を抱いている。

ダイヤは三カラットもあるブルーホワイートの最高品質のものだった。

多面体のブリリアン・カットの青みをおびる冴えた輝きは、はっと息をのむほどの高貴な光彩を放っていた。

むろん、指輪の台はプラチナである。

「ブルーホワイートと、一口に言うても、ピンからキリまでありまっさかいにな。しかし、こんな、すばらしい品質のブルーホワイートは、近頃、ちかごろとんと、お目にかかったためしがおまへん」鑑定を依頼された宝石商は、しきりに感心していた。

裸の女の死体が詰められていた段ボール箱の送り先は修しゅうがくいん学院のアパートあてになっていた。受取人は伊東玲子れいこと書かれている。

つまり、この伊東玲子という女性が段ボール詰め詰めの死体の受取人である。

表向き、段ボール箱の中身は引越荷物として申告されていた。

段ボール箱は金沢から発送されてきたもので、送り主の名前と住所が、まことしやかに送り状には記載されているが、石川県警に照会してみると、全くの架空の人物であることがわかった。

しかし、受取人の伊東玲子は、まぎれもない実在の女性であった。

彼女こそ、この不可思議な事件の謎なぞにつながる重要人物なのである。

死体の身もとは、まだ割れてはいない。

いまのところ、伊東玲子をおいて、ほかに手がかりは何ひとつないのだ。

それっ、とばかりに修学院のアパートへ向けて、音なしの音次郎こと音川警部補は部下の土井刑事をともなつて、車を飛ばした。

修学院道のバス停から東へはいった中林町なかばやしちようの閑静な場所に三階建てのこぢんまりとした鉄筋アパートが建っていた。

めざす伊東玲子の居室は、そのアパートの二階にあったが、ドアには錠が下り、配達されたままの何日分かの新聞が受け口からあふれて廊下に散らばっていた。

「この様子じゃ、このところ、ずっと留守のようすな」

土井刑事はドアをノックするのをあきらめて、うつすらと額に浮かんだ汗を掌てのひらでぬぐった。

むつつり屋の音なし警部補は、あいかわらず、むつつりと黙りこんで、部厚な唇を結んだままである。

音なし警部補は、返事のないドアの内側の、しーんと静まり返った内部の気配に奇妙な胸騒ぎをおぼえていた。

根拠はないが、薄い鋼鉄製のドアの内側で、すでに何かの異変が起こっていそうに感じられ

てならないのだ。

伊東玲子が、もし、宅送されてくる段ボール箱の中身を知っていて、この犯罪に加担しているのなら、何日間もアパートを留守にしているのが、腑に落ちないのである。

「伊東さんは、お留守ですよ」

スーパーマーケットの紙袋をかかえて階段を上ってきた若い主婦が、うさんくさそうな眼で二人を見ていた。

主婦の後から四つくらいの男の子が、ちよこちよこ階段を這いあがってくる。

「警察の者ですが……」

と土井刑事は警察手帳を主婦に示した。

ネッカチーフを頭にまいた主婦のまん丸い顔が、心もち緊張した。

「伊東さんを最後に見たのは、いつ頃でしょうか？」

土井刑事はたずねた。

アパートの主婦は刑事の問いに答えた。

「さあね、よくはおぼえていませんが……伊東さんは、この一週間ばかり、ずっとお留守のようですよ」

「いままでにも、こういうことが、ちよくちよくありましたか？　つまり、そのう、長期間、アパートを空けるなんてことが……」

土井刑事は重ねて質問した。

「そうですね。月に一度くらいは出張とかで……。しかし、ほんの二、三日くらいでしたよ。こないに長い間、留守が続くのは珍しいのと違いますか？」

主婦は、少しずつ、うちとけた態度になってきたが、そばにいる、むつつり屋こと音なし警部補が気になるらしく、ちらちらと、彼のほうへ視線を泳がせる。

土井刑事は質問をつづけた。

「出張とかいわれましたな？　伊東さんの職業は、いったい何ですか？」

住民登録に記載されている伊東玲子の生年月日から言うと、彼女は、こととして二十三歳になる。

うら若い独身女性が、月に一度くらいの割合で出張するとなれば、当然に、その職業が気にかかる。

「モデルだとか……」

「ほう？」

土井刑事は興味ありげな顔つきになった。

「いいえ、ヌードじゃないんだそうですよ」

主婦は、ヌードという刺戟語に自分勝手に反応して、け、け、け、と猥褻めいた笑い声をあげた。

土井刑事も、それにつられて、口もとをほころばせる。

音なし警部補は、あいかわらず、むつつりとした顔で黙りこんでいた。